

つなげる

教科指導の中高連携とは？

2 学習教材の開発 高校への進学を契機に、不得意科目が生まれるケースがある。生徒がどこでつまんでいるのかを分析し、そのつまづきを解消するための教材作りや教科学習指導などが、期待されている。

中・高の授業公開 中学校と高校では学習指導のスタイル、授業を進めるスピードなどは大きく異なる。お互いの授業の様子を知ることにより、授業の進め方の見直し、改善を図ることが必要になってきた。

生徒の進路意識の接続 ほとんどの中学生が高校に進学する一方、高校進学に目的を見いだせない生徒が増加した。何のために学ぶのか、将来何をしたいのかを、中学校から継続して考えることが重要になった。

生徒の学習内容の接続 中学校における選択科目の拡大などを背景に、中学校での学習内容が必ずしも高校が期待するものではなくなりつつある。中・高双方が何を教えているのかを知る必要がより高まってきた。

特集

学習指導、進路指導の両面でよりの確かな指導を実現するために、高校に求められている中学校との連携の在り方とは？

中学校と高校

進路指導の中高連携とは？

3 進路指導の共同研究 中学校と高校の進路指導の取り組みは一見似ているが、その深さは異なる。それぞれの取り組み内容を整理し、役割分担をより明確にしたり、進路指導の情報を共有化することも求められる。

学校生活を公開 高校の特色化が進む中、中学生にはより個々の高校の実状を理解した上で進学することが求められる。高校の授業や部活動の様子に触れ、高校生活をイメージするよう場が必要である。

今なぜ中高連携が必要か

連携を図ることで、多様化する生徒像を的確に把握する

生徒の進路目的を明確にさせる

これまで中学校と高校は、入試説明会や学校説明会などの場を除いて、ほとんど接触する機会を持ってこなかった。だが近年、中高連携の在り方がいかに重要視されるようになっていいる。高校の教師が中学校に向向いて出張授業を行ったり、公立高校の普通科の中にも、中学生のために学校を開放して1日体験入学を実施する所がある。では、なぜ今、中高連携なのか。これについて文教大教育学部名誉教授の仙崎武先生は「今になって動き出すのは、遅過ぎたくらいだ」と言う。



文教大教育学部名誉教授 仙崎武 大正15年生まれ。都立高校教師を経て、文教大教授に。専門は学校教育学、日本進路指導学会の会長を務める。

「中学校と高校の連携強化が大切になっている一番の理由は、高校進学率の上昇です。もうずいぶん前から、生徒が中学校を卒業してそのまま高校に進むのは当たり前になっていきます。つまり生徒の意識では、中学校と高校はつながっているんです。それなのに、これまで中学校と高校の間の連携が全くできていなかったというのは、むしろそちらの方が不自然な状態だったと言えるのではないのでしょうか」

仙崎先生は、高校進学後に学校不適合になる生徒が増していることも、中高連携が重要視されるようになった理由の一つだと言う。何のために高校に行くのか、将来何をしたいのか、目的を持って毎日過ごす生徒が目立つようになってきている。そんな生徒をどう指導するかが、高校の進路指導の重要なテーマとなりつつある。

「入学後の指導だけでなく、中学校と連携を図って、中学校の教師や生徒

に高校がどんな所か、中学校時代にどんな準備をして欲しいか、ということ伝えていく努力をすることが大切です。中学校と高校が協力して、6年間を見通した進路指導ができるようになれば理想的ですね。それが進路選択のミスマッチを減らすことになり、明確な目的意識を持って高校に入学してくる生徒を増やすことになると思います」

中学校の教科指導も多様化している

中高連携の必要性は、教科指導においても高まっている。「最近、生徒の勉強意欲や学習態度が多様化した」と感じる高校の教師は少なくない。ただ、その理由は単に生徒の気質が変化しただけではなく、中学校の教科指導の在り方が変わってきていることも理由の一つだと思われる。例えば近年では、中学校においても選択科目の枠組みが拡大され、生徒が自分で好きな科目を選んで履修する機会が増加している。また、意見発表やディベートなどを取り入れた授業も目立つようになった。

こういった試みは間違いなく生徒の多様化を押し進めていくことになる。だからこそ、今中学校でどんな学習指導が行われているのか、連携を図りながら把握することが重要になる。一方で高校側から中学校の教師に「生徒には中学生の間に、これだけの学力は身に付けさせておいて欲しい」といった要望を出すことも、接続をスムーズに実現するためには大切なことだろう。

中高連携は、学校種、設置者の違いを越えた交流であるだけに難しい面もある。個々の教師ができることもあれば、地域単位で動かないと実現が難しいものもあるだろう。だが、進路意識の面でも学習意識の面でも高校に入学してくる生徒の多様化が進んでいる。今、たとえ少しづつでも中学校と歩み寄っていくことが不可欠になっている。

中高連携が必要な背景

- ・目的意識を持たず、高校に進学してくる生徒の増加
- ・次期新課程による生徒の学力の一層の多様化
- ・選択科目の導入など、中学校の多様化、個性化
- ・総合学科や国際科など、高校の多様化、個性化

現行課程から本来高校が期待する基礎学力を身に付けていない生徒が増えてきたと言われる。この傾向は次期新課程で一層強まると考えられている。また高校の教育課程の多様化に戸惑う中学校の教師は多い。中・高それぞれで何が行われているのか、理解し合うべきテーマは多い。

中・高の接続が生徒の学習のつまずきをなくす

授業や教科指導の共同研究の場を

教科指導は、学習指導要領によつて中学校と高校の連続性が図られてはいない。だが、高校に進学した途端に、授業が急に難しくなり、嫌いになった」と感じる生徒は少なくないようだ。

高校1年生の段階で学習につまずく生徒が多いのは、一つには進度の速くなった授業に戸惑っているという理由がある。中学校では、副教材やOHPなど様々な教育機器を使って比較的じっくり教えていく余裕があつたが、高校は学ぶ量が多いためどうしても消化不良の生徒が生まれがちだ。

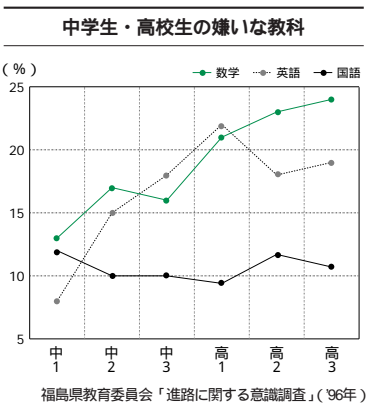
もう一つは教師が「中学校の段階で当然この程度のことには習得しているだろ」と前提にしていることを、実は生徒が身に付けていない場合が考えられる。中学校で生徒がどの分野をしつかり学び、どの分野は十分に学んでいる

の分析、「つまずきへの対策」がなされている。

『サクシード・数学』作成のまとめ役であつた福島女子高校教頭の杉昭重先生は、つなぎ教材作成の意義をこう話す。

「一番よかったのは、中学校の先生方とのネットワークができたことですね。中学校は高校の、高校は中学校の実情を意外と知らないものです。高校の教師の中には、中学校の教科書を一度も読み込んだことがない方も多いと思います」

『サクシード』作成に当たっては県内の各地域から数学だけで中学校6名、高校6名の教師が集まつた。中・高の教師が2人1組でペアになり、計6組に「関数」や「図形」といった各領域が振り分けられた。各教師は担当の領域について教科書を精読して、生



ないかを教師が正確に把握していないと、生徒は学習につまずいてしまつた。

高校入学後に授業に付いていけない生徒を減らすためには、まず中学校の教科書と学習指導要領に目を通し、彼らが何をどんな風に学んできたかを把握することで、ある程度まで改善できるはずだ。だがもう一歩進んで、中学校と高校の教師が連絡を取り合つて、双方の教科指導の違いを把握したり、要望を出す場を設定できればなお効果的だろう。具体的な連携としては

実践

つなぎ教材の作成

中・高の教師がペアで

教材作りに挑む

学習指導の中高連携を積極的に進

徒が誤りを起こしやすい部分を洗い出す。その間、ペアになつた教師同士は何度も連絡を取り合う。そして各ペアが作成したレポートを基に、今度はメンバー全員で検討を重ね、さらに練り上げていく。議論の過程では、例えば以下のような話が交わされることがしばしばあつたと言つた。

高校の教師「約分するとき、分子と分母をバラバラに約す生徒が多くて困ります」

中学の教師「中学校では、括弧がから約分するといつてはしていません。共通因数で括るといふことは、3年の因数分解になつて初めて学習することです。1、2年で定着した方法で約分しています」

高校の教師「なるほど。でもそれは高校の授業では困るんです」

こんな風にして、中・高間の共通理解が図られ、『サクシード』はでき上がつていった。

「作業は中・高双方の教師にとってメリットがありました。中学校の教師は、高校ではこのレベルまで教えるから、中学校では最低ここまで習得させなくてはいけない」ということが分かつたと思います。一方、高校の教師は中学校で教えているレベルを念頭に置きながら、高校の生徒たちに向き合つことができるようになりました。本当はこつこつと多くの教師が参加できなくてもつと多くの教師が参加できる形になればいいんじゃないかとね」

実践

中高相互の授業公開

参考にできる部分の多い中学校の公開授業

福島県の中・高連携学習指導研究委員会のもう一つの大きな取り組みが、中・高相互の授業公開である。昨年度の実施は9月。県内を6地区

以下のような内容が考えられる。

教科指導の共同研究。中学校と高校の指導方法、教科書、教材、学習内容、指導計画書の確認

生徒の実態把握。中学生と高校生の学習意欲や家庭学習時間、得意・不得意分野、誤りやすい事項等の確認

中・高双方の授業見学により、授業形態や進行速度の違い等の確認

は学校単位の大掛かりなものだが、に関しては地域の個人的なネットワークによる活動も十分に可能だ。

1

める都道府県の一つとして、福島県が挙げられる。福島県でも中学校から高校に進学する段階で、各教科を嫌いな生徒が多いことが問題となつていった(左頁グラフ参照)。県では97年度よ

高校の教師「なるほど。でもそれは高校の授業では困るんです」

「作業は中・高双方の教師にとってメリットがありました。中学校の教師は、高校ではこのレベルまで教えるから、中学校では最低ここまで習得させなくてはいけない」ということが分かつたと思います。一方、高校の教師は中学校で教えているレベルを念頭に置きながら、高校の生徒たちに向き合つことができるようになりました。本当はこつこつと多くの教師が参加できなくてもつと多くの教師が参加できる形になればいいんじゃないかとね」

2

に分け、それぞれ中学校と高校で行われた。授業公開の数日前に、授業を受け持つ教師は参加者に授業内容を記した資料を渡す。参加する教師はそれを基に、「自分だったらこんな授業をする」という指導案を書いた上で、当日に臨む。そして公開授業の後は、全参加者による授業方法や教科指導方法に関する

り中・高連携学習指導研究委員会を設置(98年度末で終了の予定)。国語、英語、数学の3教科について、中学校と高校の教師が集まつて共同研究を行った。

中・高連携学習指導研究委員会が取り組んだ事業の一つは、つなぎ教材用冊子『サクシード』(国語・数学・英語)の作成、もう一つは中高相互の授業公開である。

つなぎ教材は、文字通り中学校と高校の間をつなぐ教材。高校生がある教科や分野を嫌いになるきっかけは、中学校段階でその分野に関する理解が不十分なまま卒業して、高校でさらに高度なレベルを学ぶというケースが多い。そこで『サクシード』では、生徒が誤りを起こしやすい事項を確認。その誤りがどの学年でなぜ起きるかを分析し、つまずきをなくすための学習指導上の工夫の提案をしている。中・高双方の教師に利用してもらつたことで、接続をスムーズに行つたことを目的としている。入学直後の数回の授業を『サクシード』を基に進めたり、新しい単元に入る際の教材として活用されている。

内容はかなり緻密で、例えば『サクシード・数学』では、「数と式」「関数」「図形」「証明・文章題」の各領域で、生徒がつまずきやすい計26事項について、「つまずきの内容」「つまずき

るディスプレイが開かれた。

「中学校の授業で驚いたのは、教える方がとても丁寧なこと。様々な教材・教具を使う工夫もしています。一方、高校の授業は板書中心なので、中学校の先生は『あんなに速く進められたのでは、付いてこれない生徒が出てくるのでは』と感じられるようですね。中学校と高校の授業がこんなにも違うといつのは、一つの発見でした」(杉先生)

杉先生は最近、中学校を真似て授業で教材・教具を使う機会を増やしたそう。生徒からの評判も上々だと言つた。また新しい単元に入るときに、必ず「中学校ではどんな教え方でここまで教えてもらった?」と聞くようにしている。

「いきなり高校の教科書から始めるのではなく、中学校のおさらいをしてからスタートすると、生徒たちは比較的すんなり入っていきけるようです」

中・高連携学習指導研究委員会は今年度で終了する予定だが、杉先生は今後も何らかの形で、中学校の教師とのつながりは保ち続けたいと語る。

つながる

特集

中学校と高校

3 協力体制を築くことで 継続的で効果的な進路指導を実現

中学校の進路指導を 高校の指導につなぐ

冒頭にも述べたように、生徒の目的意識、進路意識の低下が高校での進路指導の大きな課題となっている。ある高校教師は次のように語る。

「大学入試を受ける直前になって、急に志望学部・学科が揺れ動く生徒が増えています。自分の生き方や将来に対する考えが確立されずに曖昧なままだから、こつこつとすることが起きるのだと思います」

そんな生徒への対応として、職業研究や大学研究に力を入れている高校は多い。だが生徒の人生観、進路観や職業観を育成する指導は、本来は高校だけでできるものではない。子どもが自我に目覚め、自己探求が始まるのは中学生の時期だと言われている。中学生のときから自分の興味・関心、適性について考えさせる機会を設け、高校で

はそれを発展的に継承していく形が望ましいと言えるだろう。

現在中学校では、進路指導において様々な取り組みをしている。具体例を挙げると以下のようなことになる。

職業調べ、職場訪問、1日職場体験
社会人を招いての進路講話

母校出身の現役高校生を招いての高校生活の説明会

生徒による「自分史」や「将来の夢」に関する作文など

進路意識調査の実施

言うまでもなく、こつこつとした実践は多くの高校でも同じように行われているものである。だからこそ、中学校と高校が連携を図れば、継続的で効果的な指導が期待できる。特に今は、2002年度から導入される完全週5日制を前にして、学校行事の精選が叫ばれている時期でもある。中学校と高校がお互いの指導内容をすり合わせることは、「中学校段階、高校段階で真に必要な

とされる進路指導とは何か」を見極める上で重要と言えるだろう。

また中高連携は、別の面でも必要性が高まっている。近年、多くの地域の高校入試において、推薦入試の拡大実

実践

6年間を通じた指導計画の作成

発達段階に応じて 取り組みを 決める

進路指導における中学校と高校の連携は、具体的には二つある。一つは中・高の教師が協力して、指導に関する共同研究を行うこと。もう一つは高校側から働き掛けて、中学校の生徒や教師に、高校での教育や生活を知ってもらう機会を設けることである。

まず、共同研究の方法から考えていようと、中学校と高校が事前に打ち合わせて、高校進学のためのや高校生活などについて話すようにした。当日、生徒からはカリキュラムのことなど、かなり突っ込んだ質問があったと言った。また「高校見学会」は、中学生を自校に招いて高校の雰囲気を知ってもらうという企画である。具体的には授業公開、部活動公開、施設見学、学校行事の見学などが挙げられる。

この「高校見学会」をさらに発展させたのが「体験入学」だ。高校の教師が教壇に立ち、中学生に実際に授業を受けてもらうわけだが、従来は職業科や専門学科で行われるケースがほとんどだった。だが最近、普通科の中にも実施する高校が現れている。宮城県のある高校で行われた「体験入学」では、中学生は、まず先輩たちの学習風景を見学した後、数学や英語などの特別授業を受けた。どの教科を受講したかについては、あらかじめ生徒から希望を募った。生徒からは「高校の雰囲気味わえた」と好評だったそうだ。

高校の教師が中学生に教えるために、中学校を訪ねて指導をする「出張授業」も盛んになりつつある。生徒が楽しめるようにテーマにも工夫を凝らし、テキストセッションなどを取り入れた参加型の内容が多い。しかし、そのために

施や選抜方法の見直しなどの諸改革が急速に進んでいる。さらに総合学科や国際科など新しいタイプの学科が増えてきており、普通科においても特色ある学校作りが模索されている。

多くの中学校の教師は、その急激な変化に戸惑いを感じているのも事実だ。生徒に適切な高校進学の指導をするために、より多くの情報を必要としている。高校入学後に学校不適應を起す生徒を少しでも減らすために、高校側から中学校への多様な情報提供が、これまで以上に求められている。

みたい。前出の仙崎武先生は、生徒の発達段階に沿った課題を軸とした中・高進路指導の体系化を提唱する。

「生徒の発達段階に応じて、必要となる指導は変わってきます。そこでそれぞれの学年の進路指導課題を設定して、それに合わせた取り組みを決めていくことが大切なのではないでしょうか。例えば、北海道立教育研究所が作成した『児童生徒の健全な発展を目指す発達課題』では、中学生は、持ち味の発見、価値の明確化、生き方の自覚

イベント的な要素が強くなり、普段の高校の授業とは掛け離れたものになり易い。とは言え、生徒は、知的な刺激を受けられることにより、進学意欲、学習意欲が高まるという効果がある。

「体験入学」や「出張授業」を実施する場合は、イベント的な時間で終わらせないためにも、その前後に説明会や質問会を開き、「中学校と高校での授業は何が違うか」「予習や復習はどれくらいしなければいけないか」といったことを中学生に伝えておく必要があるだろう。その上で「出張授業」などに臨めば、中学生はより深く高校の様子が分かり、高校生になった自分の生活をイメージできるはずだ。

これらの取り組みを実現するには、地域を挙げての体制作りが必要になってくる。まずは学区内の中学校や他の高校の教師とのネットワーク形成から始めてはどうだろう。容易にできる取り組みではないかも知れないが、進路指導面における中高連携が今後重要性を増すことは、間違いないだろう。

実践

学校と授業の公開

見学会や 体験入学で高校を 実感してもらおう

さて、中学校の生徒や教師に、高校について知ってもらうための方法としては、「高校説明会」「高校見学会」「体験入学」などがある。

「高校説明会」は、文字通り高校の教師が中学校を訪ねて、生徒や教師

また共同研究は、高校は中学校の、中学校は高校の実践事例を知る場としても活用できる。双方が抱えている進路指導上の課題や、生徒の進路意識調査の結果を公表したり、今時の生徒気質について思い思いに話し合うような機会を設けることが可能だ。

ネットワークが確立したら、生徒の個別指導のためのシステム作りに取り組みてもよい。例えば、生徒の進路意識や進路希望の変化について記録できる「生徒のあゆみ」を作成する。書式を工夫して中学校、高校の6年間を通して使えるものになれば、進路指導上の連続性を保つことができるだろう。

保護者に自分の高校についての説明を行うというものは、多くの高校で以前から実施されてきたが、従来は入試の説明に終始しがちだった。だが高校の多様化・個性化が進んでいる今、進路不適應を防ぐためにも、その高校の指導理念や特色、他校との違いを述べるこ

とが大切になってきている。山梨県のある地域では、「高校説明会」を単なる入試の説明で終わらせな

つながる

特集

中学校と高校

連携型中高一貫校の取り組み

人生観、職業観を養ったための 6年間の継続的指導を目指す

三豊県立 飯南高校

地元で生まれた子が 地元で育つ教育を

98年、学校教育法の一部が改正され、公立校においての中高一貫教育が可能になった。中教審は中高一貫教育のメ



飯南高校校長
中沢薫
赴任して2年目、
20年以上前、化学の教師
として同校で教えていた
経験を持つ。
前任校は津西高校



飯南高校教頭
荒井順治
今年度より同校に赴任、
日本史担当。
「本校は自然に恵まれて
いることもあって、生徒
は皆純粋ですよ。」

リットとして「6年間の計画的・継続的な教育指導が展開でき、効果的な一貫した教育が可能となること」「6年間に渡り生徒を継続的に把握することにより、生徒の個性を伸長したり、優れた才能の発見がよりできること」などを挙げている。進路指導や学習指導の中・高間の連携が大きな課題となっている今、注目に値する動きと言える。

現在、公立の中高一貫校は全国に3校しか設置されていないが、飯南高校はそのうちの1校として99年4月より一貫教育をスタートさせた。飯南高校の場合、いわゆる連携型（コラム参照）に当たり、飯南町立飯南中学校、飯高町立飯高西中学校、飯高町立飯高東中学校の3校と協力関係を結んでいる。

同校は県立普通科高校として約50年の歴史を歩んできたのだが、今回、中

高一貫校へと踏み切った理由を中沢薫校長は次のように語る。

「飯南地区は過疎化が進んでいて、若い人材が都市部に流出しています。高校進学についても同じで、中学校を卒業した後、バスで1時間かかる松阪市内に通っている生徒も多く見られます。これでは地元で生まれた子どもたちが、地元で目を向ける機会が少ないうまま育つことになりかねない。都市中心の学校教育が過疎を作ったと言われるも仕方ありません。そこで中学校と連携を強め、地元で生まれた子が地元の中学校と高校で自らの人生観や進路観を養えるような教育を実現できないかと考えたのです。」

同校がこの三つの中学校と中高一貫教育の99年度導入を決めたのは、その1年前の98年4月のこと。同時に普通

科から総合学科への改編も決定した。総合学科の方がカリキュラムが弾力的に組めるため、「郷土学習」など地域への関心や理解を育む教育ができる。また、「産業社会と人間」など、自己の将来像や職業観を育成する授業を展開することも容易だからだ。

学力試験をなくし 課題レポートで選抜

同校では連携に当たって、入学者選抜、教育課程、教職員・生徒の交流、に関する三つの調査委員会を設置した。委員は同校と各中学校の教頭及び教諭が務めている。具体的な検討課題は左表の通りだが、まず着目したのは入試制度に関する検討だ。

中教審は中高一貫教育の利点の一つ

三つの調査委員会での主な検討課題

- 入学者選抜に関する調査委員会
- ・入学者選抜における「簡便な方法」の具体的な内容
 - ・連携校とその他の学校との入学定員の区分
 - ・定員の弾力化
 - ・連携校への志望の決定時期

- 教育課程に関する調査委員会
- ・教科における「郷土学習」の年間計画の作成
 - ・特別活動における「郷土学習」の計画の作成
 - ・各教科の学習内容の連携の在り方の研究
 - ・中学校の選択教科での「郷土学習」の位置付け
 - ・「郷土学習」での地域の人材、非常勤講師の活用

- 教職員・生徒の交流に関する調査委員会
- ・授業での教職員の相互派遣
 - ・部活動、学校行事での教職員の相互派遣
 - ・部活動、学校行事における生徒の交流（合同練習など）
 - ・授業や学校行事及び部活動における教職員、生徒の交流についての研究
 - ・高校の施設を使った中学生の学習活動
 - ・生徒の移動、輸送にかかわる諸課題
 - ・インターネットなどのマルチメディアを利用した学校間交流

として、「高校入試の影響を受けず、ゆとりのある安定的な学校生活が送れること」を挙げている。これを受けて、連携型についても学力試験を課さず、面接などでの選抜ができるようになった。飯南高校では今年度入試については従来通りの学力試験を実施したが、来年度より連携校からの志願者については、課題レポート及び面接のみで合格者を決めると言っている。調査書及び推薦書も廃止される。同校の荒井順治教頭はこう語る。

「保護者や教師の中には、高校入試で学力試験がなくなると、子どもたちが勉強しなくなるのでは、と不安を持つ方もいました。でも生徒に、中学校で学ぶことは高校に入ってからもつながつてくるから学習は疎かにできないんだと説明すると、きちんと理解してくれます。私は心配していません。」

次に、中高連携の柱として打ち出したのが「郷土学習」である。地域について調べ、考えることは、自分たちが社会の中でどう生きていくか、あるいは社会をどう変えていきたいかといったことを模索する上での土台になる。

コラム 中高一貫の三つのパターン

- ・一口に中高一貫校と言っても、実は三つのタイプに分けることができる。いずれも高校入試がない、あるいは学力試験のない簡便な高校入試で、中学校教育と高校教育の接続を図っている。
- ・「中等教育学校」：6年制として設置され、生徒は文字通り6年間を一つの学校で一貫して学ぶことになる。
- ・「併設型」：一貫校・県や市などの同一の設置者が中学校と高校を設け、入試が課されることなく両者が接続されているというものである。
- ・「連携型」：一貫校一校または複数の市町村立中学校と都道府県立高校などが連携を結び、学力試験なしで生徒は高校に進学できる。中学校と高校の間では、教科指導、進路指導が6年間計画的・継続的に行われることになる。

飯南高校はこの「連携型」中高一貫校に当たる。

人的交流の面でも進んでいる。現在、同校の6人の教師が週に1回、それぞれ受け持ちの中学校を訪れて、中学校の学習内容を教えている。

授業は中学校の教師とのチーム・ティーチングで行われる。高校の教師としては、中学校の教師がどんな授業をしているかが分かるし、実際に中学生に教えることで、数年後に飯南高校に入學してくるであろう生徒たちの様子も把握できるわけだ。

「本校の教師が、中学校の教師や生徒の姿を知る機会を持つことが大事なんです。今まで、あまりにも中高連携は行われてきませんでしたからね」（中沢校長）

今後は部活動や学校行事における生徒交流や、中学生が同校の実習室などを使った学習活動なども計画していると言っている。

三つの中学校を卒業して飯南高校に入學した生徒たちがどんな風に成長していくか、中高連携の在り方を考える上でも、同校の今後が楽しみだ。

高校の教師が 中学校で教える

飯南高校と三つの中学校との連携は、

飯南高校と三つの中学校との連携は、

つながる

特集

中学校と高校